

1)開会の辞

森岡茂夫(国際長寿センター日本 理事長)



只今ご紹介いただきました、国際長寿日本センター理事長の森岡でございます。

本日は、このように多くの方がシンポジウム:「誰が介護する?介護の今-国際比較-」にお集まりくださり、まことにありがとうございます。最初に私ども国際長寿センターの説明と、このシンポジウムの目的ならびに演者のご紹介を申し上げて、議事に入って参りたいと思います。

私ども国際長寿日本センターは、世界的に高名なアメリカのロバート・バトラー博士の提唱により、米国センターとともに1990年に設立されました。日本センターの設立に際しては、当時の厚生省のご指導のもと、産・官・学の英知と民間資金を結集する形での取り組みがなされました。またその後順次、フランス・イギリス・ドミニカ共和国においてもセンターが設立され、一昨日新しいメンバーとしてインドの加入が承認されました。

人類がかつて経験したことのない超高齢社会を迎えるにあたって、国際長寿センターでは、国際的な連合体としてのゆるやかな連携の中で、高齢者がより有意義な人生を送れるように「プロダクティブ・エイジング」をキーワードにして、活動を行っております。具体的には家族・介護・雇用・教育・住宅・町づくりなど政治・経済・社会・福祉・文化にわたる学際的な分野での調査研究と、それに基づいた政策提言・国際交流などに積極的に取り組んでおります。

また日本センターでは独自の活動として、介護にあたる家族を支えることを目的とした介護支え合い電話相談事業を行っております。フリーダイヤルで全国からのご相談を受けるこの事業も、この秋で丸4年目をむかえ、大変に高い信頼と評価をいただいております。

本日のスピーカーは、国際長寿センターアライアンス各国の関係者を中心としております。発言順にご紹介申し上げます。アメリカは、やむを得ない事情で来日ができなくなったロバート・バトラー理事長の代理として、米国センター国際部長のノーラ・オブライエン女史がプレゼンテーションを行います。次いでフランスは、著名な老年医学者であるフランソワーズ・フォレット理事長が、特にアルツハイマーの介護を中心にしたフランスの状況を発表くださいます。次に、イギリスアルツハイマー協会の評議員であるピーター・レイコック氏からは、英国政府の方針と社会における課題について発表をさせていただきます。ドミニカ共和国は、国際的に活躍の老年医学者ロジー・ペレイラ女史から、発展途上国ならではの問題として、老化と病気に関する意識変革にむけた取り組みが述べられます。最後に日本からは、大きな話題となっております介護保険制度の見直しに向けて、厚生労働省老健局総務課の山崎史郎課長のお話を伺います。全体のコーディネイトは日本センターの研究アドバイザー工藤由貴子が行います。

各国の現状を知り、その取り組みの成果と問題点を出しあって、ともに解決策を考えてまいる機会にすることができれば、主催者としてこれにまさる喜びはありません。活発な議論を期待いたします。

簡単ではございますが以上座長のご挨拶といたします。ご清聴ありがとうございました。